

---

# 私は・・・宮野志保。

詩音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は・・・宮野志保。

### 【Nコード】

N8439T

### 【作者名】

詩音

### 【あらすじ】

新×志です。

名探偵コナンの工藤新一と宮野志保のカップリング小説です。

## ずっと一緒(前書き)

新×志小説です。稀に過激描写があります。ご注意ください。

## ずっと一緒

「灰原・・・ちよつといいか？」

聞きなれた彼の声。私たちは今、小学5年生。

もつとも、彼と私は21歳と22歳なのだが。

「・・・何？」

「例の薬の解毒剤、出来たのか？」

「まだよ。」

彼が突然こんなことを訊いてくるのは、私がこの前、

APTX4869の解毒剤をつくるのに適した薬品を見つけたことを彼に話したから。

「近々、完成するわ。でも、ちゃんとマウスに試してからよ。」

「わーってるよ。そんなこと。俺もまだ死にたくねえしな（笑）」

冗談交じりに彼が言う。

正直私には迷いがあった。

この解毒剤が完成したら、彼は迷わず彼女のところへ行くだろう。

そして、幼児化したままの私は一人ぼっちになる……。

このままでも、元の姿に戻ったとしても、私には居場所なんて無い。

そんなこと随分前からわかっていたのにね……。

組織にいたところからいろいろな男性と関係を持ってきた。

でも、そこに愛なんて無かった。

組織から抜け出して、光の世界にやってきて、

初めて恋心というものを知った。

私は……彼のが好き。

でも、私には作った薬の被害にあった彼を元に戻す義務がある。

”元に戻らないで……ずっとこのままで私のそばにいて……。”

そんなこと言える立場じゃないことくらいわかってる。

私は意を決して、彼に薬を渡すことにした。

・・・マウス実験は見事成功、今回の解毒剤は副作用も軽めで上出来だった。

これならもう幼児化した姿に戻ることもないだろう。

翌朝、彼に電話をかける。

「工藤君・・・例の薬の解毒剤、完成したわよ。」

これまでの試作品と違って、もう幼児化した姿に戻ることはないわ。」

「そうか・・・。」

「今から博士の家、来られる?」

「わかった。」

おかしい。彼の口調がいつもと違った。

いつもなら嬉しそうに飛んでくるのに。

やはり、帝丹小学校のみんなとの別れがつらいのだろうか。

昨日、探偵団のみんなとお別れパーティーもした。

それでもやはり未練が残っているのだろうか。

私も、この解毒剤の完成を機に転校することになっていた。

彼に薬を渡したら、もう自分の役目は終わり。

自らの罪を認め、自首しようと思っていた。

チャリン・・・ドアのベルの音。

彼がやってきたのだった。

「よお・・・灰原・・・。」

「はい。これ。」

そうやって小さな瓶に入った薬を手渡す。

「即効性で、もう副作用もないわ。安心して飲んできなさい。」

「サンキュー。」

そうやって彼は博士の部屋へ入っていった。

学会で長野に出かけている博士は明後日まで戻ってこないはずだ。

私は、彼が元に戻って血液検査が終わったらすぐにでもここから去るつもりだった。

「さようなら……。江戸川君。」

博士の部屋に向かってそうつぶやき、検査の準備を始めた。

しばらくして、彼は博士の部屋から出てきた。

大人の姿になつた彼。

もう二度と、彼と同じ目線で話すことはできない。

「さあ。血液検査するから、ここに座りなさい。」

「ああ……。」

私が準備をしている間、彼はずっと何か上の空といった感じだった。

「何？彼女のことでも考えてるの？」（笑）

「えっ！？あ……ああ……。」

「相変わらず仲良しなのね……。」

「あ……あのさ……灰原……。」

「あら。何かしら？……え！？ひゃっ／＼／」

彼に抱きしめられている。

必死に抵抗しようとしたけど、大人の彼にはかなわない。

彼に奪われていく私の小さな唇。

言葉と身体を奪われ、どうすることもできなくなっていました。

ん？何か口の中に・・・？薬？・・・まさか！

「一緒に元の姿に戻ろうぜ。」

え！？どういうこと？

「おめえが瓶の中に入れてた予備の解毒剤。」

ああ・・・私・・・あれを飲まされちゃったのね。

万が一幼児化した姿に戻ってしまったときのためにいれておいた、予備の解毒剤を。

馬鹿・・・。

あれ・・・一個しか無かったの・・・元に戻ったらどうする気よ・・・。

そんなことを考えながら、私は眠ってしまった。

ほとんど副作用は無い薬だけど、先週からずっと研究室にこもりっぱなしで

疲れがたまってたのね・・・。

目が覚めると私は、彼の腕の中で彼を口付けを交わしていた。

## ずっと一緒(後書き)

初投稿です。これから頑張って連載を続けていきたいと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8439t/>

---

私は・・・宮野志保。

2011年6月6日11時10分発行